歯車

芥川竜之介

一　レエン・コオト

僕は或知り人の結婚披露式につらなる為(ため)に鞄(かばん)を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の両がわは大抵松ばかり茂っていた。上り列車に間に合うかどうかは可也(かなり)怪しいのに違いなかった。自動車には丁度僕の外に或理髪店の主人も乗り合せていた。彼は棗(なつめ)のようにまるまると肥った、短い顋髯(あごひげ)の持ち主だった。僕は時間を気にしながら、時々彼と話をした。

「妙なこともありますね。××さんの屋敷には昼間で

も幽霊が出るって云うんですが」
「昼間でもね」
僕は冬の西日の当った向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合せていた。
「尤も天気の善い日には出ないそうです。一番多いのは雨のふる日だって云うんですが」
「雨の降る日に濡れに来るんじゃないか？」
「御常談で。……しかしレエン・コオトを着た幽霊だって云うんです」
自動車はラッパを鳴らしながら、或停車場へ横着けになった。僕は或理髪店の主人に別れ、停車場の中へ

はいって行った。すると果して上り列車は二三分前に出たばかりだった。待合室のベンチにはレエン・コオトを着た男が一人ぼんやり外を眺めていた。僕は今聞いたばかりの幽霊の話を思い出した。が、ちょっと苦笑したぎり、とにかく次の列車を待つ為に停車場前のカッフェへはいることにした。

　それはカッフェと云う名を与えるのも考えものに近いカッフェだった。僕は隅のテエブルに坐り、ココアを一杯註文（ちゅうもん）した。テエブルにかけたオイル・クロオスは白地に細い青の線を荒い格子（こうし）に引いたものだった。しかしもう隅々には薄汚いカンヴァスを露（あらわ）していた。

僕は膠(にかわ)臭いココアを飲みながら、人げのないカッフェの中を見まわした。埃(ほこり)じみたカッフェの壁には「親子丼(おやこどんぶり)」だの「カツレツ」だのと云う紙札が何枚も貼(は)ってあった。

「地玉子、オムレツ」

僕はこう云う紙札に東海道線に近い田舎を感じた。それは麦畑やキャベツ畑の間に電気機関車の通る田舎だった。……

次の上り列車に乗ったのはもう日暮に近い頃だった。僕はいつも二等に乗っていた。が、何かの都合上、その時は三等に乗ることにした。

　汽車の中は可也こみ合っていた。しかも僕の前後にいるのは大磯(おおいそ)かどこかへ遠足に行ったらしい小学校の女生徒ばかりだった。僕は巻煙草に火をつけながら、こう云う女生徒の群れを眺めていた。彼等はいずれも快活だった。のみならず殆どしゃべり続けだった。

「写真屋さん、ラヴ・シインって何？」

　やはり遠足について来たらしい、僕の前にいた「写真屋さん」は何とかお茶を濁していた。しかし十四五の女生徒の一人はまだいろいろのことを問いかけていた。僕はふと彼女の鼻に蓄膿症(ちくのうしょう)のあることを感じ、何か頬笑(ほほえ)まずにはいられなかった。それから又僕の隣

りにいた十二三の女生徒の一人は若い女教師の膝（ひざ）の上に坐り、片手に彼女の頸（くび）を抱きながら、片手に彼女の頰をさすっていた。しかも誰かと話す合い間に時々こう女教師に話しかけていた。

「可愛いわね、先生は。可愛い目をしていらっしゃるわね」

　彼等は僕には女生徒よりも一人前の女と云う感じを与えた。林檎（りんご）を皮ごと嚙（か）じっていたり、キャラメルの紙を剥（む）いていることを除けば。……しかし年かさらしい女生徒の一人は僕の側を通る時に誰かの足を踏んだと見え、「御免なさいまし」と声をかけた。彼女だけは

彼等よりもませているだけに反(かえ)って僕には女生徒らしかった。僕は巻煙草を啣(くわ)えたまま、この矛盾を感じた僕自身を冷笑しない訣(わけ)には行かなかった。

いつか電燈をともした汽車はやっと或郊外の停車場へ着いた。僕は風の寒いプラットホオムへ下り、一度橋を渡った上、省線電車の来るのを待つことにした。すると偶然顔を合せたのは或会社にいるT君だった、僕等は電車を待っている間に不景気のことなどを話し合った。T君は勿論(もちろん)僕などよりもこう云う問題に通じていた。が、逞(たくま)しい彼の指には余り不景気には縁のない土耳古(トルコ)石の指環(ゆびわ)も嵌(は)まっていた。

「大したものを嵌めているね」
「これか？　これはハルビンへ商売に行っていた友だちの指環を買わされたのだよ。そいつも今は往生している。コオペラティヴと取引きが出来なくなったものだから」

　僕等の乗った省線電車は幸いにも汽車ほどこんでいなかった。僕等は並んで腰をおろし、いろいろのことを話していた。Ｔ君はついこの春に巴里（パリ）にある勤め先から東京へ帰ったばかりだった。従って僕等の間には巴里の話も出勝ちだった。カイヨオ夫人の話、蟹（かに）料理の話、御外遊中の或殿下の話、……

「仏蘭西（フランス）は存外困ってはいないよ、唯元来仏蘭西人と云うやつは税を出したがらない国民だから、内閣はいつも倒れるがね。……」
「だってフランは暴落するしさ」
「それは新聞を読んでいればね。しかし向うにいて見給え。新聞紙上の日本なるものはのべつ大地震や大洪水があるから」
するとレエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ来て腰をおろした。僕はちょっと無気味になり、何か前に聞いた幽霊の話をT君に話したい心もちを感じた。が、T君はその前に杖の柄をくるりと左へ向け、顔は

前を向いたまま、小声に僕に話しかけた。
「あすこに女が一人いるだろう？　鼠色の毛糸のショオルをした、……」
「あの西洋髪に結った女か？」
「うん、風呂敷包みを抱えている女さ。あいつはこの夏は軽井沢にいたよ。ちょっと洒落（しゃ）れた洋装などをしてね」
しかし彼女は誰の目にも見すぼらしいなりをしているのに違いなかった。僕はT君と話しながら、そっと彼女を眺めていた。彼女はどこか眉の間に気違いらしい感じのする顔をしていた。しかもその又風呂敷包み

の中から豹（ひょう）に似た海綿をはみ出させていた。

「軽井沢にいた時には若い亜米利加（アメリカ）人と踊ったりしていたっけ。モダアン……何と云うやつかね」

レエン・コオトを着た男は僕のＴ君と別れる時にはいつかそこにいなくなっていた。僕は省線電車の或停車場からやはり鞄をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行った。往来の両側に立っているのは大抵大きいビルディングだった。僕はそこを歩いているうちにふと松林を思い出した。のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？——と云うのは絶えずまわっている半透明の歯車だった。僕はこう云う

経験を前にも何度か持ち合せていた。歯車は次第に数を殖やし、半ば僕の視野を塞(ふさ)いでしまう、が、それも長いことではない、暫らくの後には消え失せる代りに今度は頭痛を感じはじめる、――それはいつも同じことだった。眼科の医者はこの錯覚（？）の為に度々僕に節煙を命じた。しかしこう云う歯車は僕の煙草に親(した)しまない二十(はたち)前にも見えないことはなかった。僕は又はじまったなと思い、左の目の視力をためす為に片手に右の目を塞いで見た。左の目は果して何ともなかった。しかし右の目の瞼(まぶた)の裏には歯車が幾つもまわっていた。僕は右側のビルディングの次第に消えて

しまうのを見ながら、せっせと往来を歩いて行った。ホテルの玄関をはいった時には歯車ももう消え失せていた。が、頭痛はまだ残っていた。僕は外套（がいとう）や帽子を預ける次手（ついで）に部屋を一つとって貰うことにした。それから或雑誌社へ電話をかけて金のことを相談した。

結婚披露式の晩餐（ばんさん）はとうに始まっていたらしかった。僕はテエブルの隅に坐り、ナイフやフォオクを動かし出した。正面の新郎や新婦をはじめ、白い凹（おう）字形のテエブルに就いた五十人あまりの人びとは勿論いずれも陽気だった。が、僕の心もちは明るい電燈の光の下にだんだん憂鬱になるばかりだった。僕はこの心もちを

遁れる為に隣にいた客に話しかけた。彼は丁度獅子のように白い頬髯を伸ばした老人だった。のみならず僕も名を知っていた或名高い漢学者だった。従って又僕等の話はいつか古典の上へ落ちて行った。

「麒麟はつまり一角獣ですね。それから鳳凰もフェニックスと云う鳥の、……」

この名高い漢学者はこう云う僕の話にも興味を感じているらしかった。僕は機械的にしゃべっているうちにだんだん病的な破壊慾を感じ、堯舜を架空の人物にしたのは勿論、「春秋」の著者もずっと後の漢代の人だったことを話し出した。するとこの漢学者は露骨

に不快な表情を示し、少しも僕の顔を見ずに殆ど虎の唸（うな）るように僕の話を截（き）り離した。

「もし堯舜もいなかったとすれば、孔子は譃（うそ）をつかれたことになる。聖人の譃をつかれる筈はない」

僕は勿論黙ってしまった。それから又皿の上の肉へナイフやフォオクを加えようとした。すると小さい蛆（うじ）が一匹静かに肉の縁に蠢（うご）めいていた。蛆は僕の頭の中にWormと云う英語を呼び起した。それは又麒麟や鳳凰のように或伝説的動物を意味している言葉にも違いなかった。僕はナイフやフォオクを置き、いつか僕の杯にシャンパアニュのつがれるのを眺めていた。

やっと晩餐のすんだ後、僕は前にとって置いた僕の部屋へこもる為に人気（ひとげ）のない廊下を歩いて行った。廊下は僕にはホテルよりも監獄らしい感じを与えるものだった。しかし幸いにも頭痛だけはいつの間にか薄らいでいた。

僕の部屋には鞄は勿論、帽子や外套も持って来てあった。僕は壁にかけた外套に僕自身の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣裳戸棚（いしょうとだな）の中へ抛（ほう）りこんだ。それから鏡台の前へ行き、じっと鏡に僕の顔を映した。鏡に映った僕の顔は皮膚の下の骨組みを露わしていた。蛆はこう云う僕の記憶に忽ちはっきり浮び出した。

僕は戸をあけて廊下へ出、どこと云うことなしに歩いて行った。するとロッビイへ出る隅に緑いろの笠をかけた、脊（せい）の高いスタンドの電燈が一つ硝子（ガラス）戸に鮮（あざや）かに映っていた。それは何か僕の心に平和な感じを与えるものだった。僕はその前の椅子に坐り、いろいろのことを考えていた。が、そこにも五分とは坐っている訣に行かなかった。レエン・コオトは今度もまた僕の横にあった長椅子の背に如何（いか）にもだらりと脱ぎかけてあった。

「しかも今は寒中だと云うのに」

僕はこんなことを考えながら、もう一度廊下を引き

返して行った。廊下の隅の給仕だまりには一人も給仕は見えなかった。しかし彼等の話し声はちょっと僕の耳をかすめて行った。それは何とか言われたのに答えた All right と云う英語だった。「オオル・ライト」？——僕はいつかこの対話の意味を正確に摑もうとあせっていた。「オオル・ライト」？「オオル・ライト」？何が一体オオル・ライトなのであろう？

僕の部屋は勿論ひっそりしていた。が、戸をあけてはいることは妙に僕には無気味だった。僕はちょっとためらった後、思い切って部屋の中へはいって行った。それから鏡を見ないようにし、机の前の椅子に腰をお

ろした。椅子は蜥蜴（とかげ）の皮に近い、青いマロック皮の安楽椅子だった。僕は鞄をあけて原稿用紙を出し、或短篇を続けようとした。けれどもインクをつけたペンはいつまでたっても動かなかった。のみならずやっと動いたと思うと、同じ言葉ばかり書きつづけていた。All right …… All right …… All right sir …… All right ……

　そこへ突然鳴り出したのはベッドの側にある電話だった。僕は驚いて立ち上り、受話器を耳へやって返事をした。

「どなた？」

「あたしです。あたし……」

相手は僕の姉の娘だった。

「何だい？　どうかしたのかい？」

「ええ、あの大へんなことが起ったんです。ですから、……大へんなことが起ったもんですから。今叔母さんにも電話をかけたんです」

「大へんなこと？」

「ええ、ですからすぐに来て下さい。すぐにですよ」

電話はそれぎり切れてしまった。僕はもとのように受話器をかけ、反射的にベルの鈕（ボタン）を押した。しかし僕の手の震えていることは僕自身はっきり意識してい

た。給仕は容易にやって来なかった。僕は苛立（いらだ）たしさよりも苦しさを感じ、何度もベルの釦を押した。やっと運命の僕に教えた「オオル・ライト」と云う言葉を了解しながら。

　僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れていない或田舎に轢死（れきし）していた。しかも季節に縁のないレエン・コオトをひっかけていた。僕はいまもそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけている。真夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼ってあるのかも知れない。

二　復讐

僕はこのホテルの部屋に午前八時頃に目を醒(さ)ました。が、ベッドをおりようとすると、スリッパアは不思議にも片っぽしかなかった。それはこの一二年の間、いつも僕に恐怖だの不安だのを与える現象だった。のみならずサンダアルを片っぽだけはいた希臘(ギリシャ)神話の中の王子を思い出させる現象だった。僕はベルを押して給仕を呼び、スリッパアの片っぽを探して貰うことにした。給仕はけげんな顔をしながら、狭い部屋の中を探

しまわった。
「ここにありました。このバスの部屋の中に」
「どうして又そんな所に行っていたのだろう？」
「さあ、鼠かも知れません」
僕は給仕の退いた後(のち)、牛乳を入れない珈琲(コーヒー)を飲み、前の小説を仕上げにかかった。凝灰岩を四角に組んだ窓は雪のある庭に向っていた。僕はペンを休める度にぼんやりとこの雪を眺めたりした。雪は莟(つぼみ)を持った沈丁花(じんちょうげ)の下に都会の煤煙(ばいえん)によごれていた。それは何か僕の心に傷(いた)ましさを与える眺めだった。僕は巻煙草をふかしながら、いつかペンを動かさずにいろいろのこ

とを考えていた。妻のことを、子供たちのことを、就中（なかんずく）姉の夫のことを。……

姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑を蒙（こうむ）っていた。それもまた実際仕かたはなかった。彼は家の焼ける前に家の価格に二倍する火災保険に加入していた。しかも偽証罪を犯した為に執行猶予中の体になっていた。けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ帰る度に必ず火の燃えるのを見たことだった。僕は或（あるい）は汽車の中から山を焼いている火を見たり、或は又自動車の中から（その時は妻子とも一しょだった）常磐橋界隈（ときわばしかいわい）の火事を見たりしていた。それは

彼の家の焼けない前にもおのずから僕に火事のある予感を与えない訣には行かなかった。
「今年は家が火事になるかも知れないぜ」
「そんな縁起の悪いことを。……それでも火事になったら大変ですね。保険は碌についていないし、……」
　僕等はそんなことを話し合ったりした。しかし僕の家は焼けずに、――僕は努めて妄想を押しのけ、もう一度ペンを動かそうとした。が、ペンはどうしても一行とは楽に動かなかった。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上に転がったまま、トルストイのPolikouchka を読みはじめた。この小説の主人公は

虚栄心や病的傾向や名誉心の入り交った、複雑な性格の持ち主だった。しかも彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加えさえすれば、僕の一生のカリカテュアだった。殊に彼の悲喜劇の中に運命の冷笑を感じるのは次第に僕を無気味にし出した。僕は一時間とたたないうちにベッドの上から飛び起きるが早いか、窓かけの垂れた部屋の隅へ力一ぱい本を抛（ほう）りつけた。

「くたばってしまえ！」

　すると大きい鼠が一匹窓かけの下からバスの部屋へ斜めに床の上を走って行った。僕は一足飛びにバスの部屋へ行き、戸をあけて中を探しまわった。が、白い

タッブのかげにも鼠らしいものは見えなかった。僕は急に無気味になり、慌(あわ)ててスリッパアを靴に換えると、人気(ひとげ)のない廊下を歩いて行った。

廊下はきょうも不相変(あいかわらず)牢獄(ろうごく)のように憂鬱だった。僕は頭を垂れたまま、階段を上(あが)ったり下りたりしているうちにいつかコック部屋へはいっていた。コック部屋は存外明るかった。が、片側に並んだ竈(かまど)は幾つも炎を動かしていた。僕はそこを通りぬけながら、白い帽をかぶったコックたちの冷やかに僕を見ているのを感じた。同時に又僕の堕(お)ちた地獄を感じた。「神よ、我を罰し給え。怒り給うこと勿(なか)れ。恐らくは我滅びん」

——こう云う祈禱（きとう）もこの瞬間にはおのずから僕の脣（くちびる）にのぼらない訣には行かなかった。

　僕はこのホテルの外へ出ると、青ぞらの映った雪解けの道をせっせと姉の家へ歩いて行った。道に沿うた公園の樹木は皆枝や葉を黒ませていた。のみならずどれも一本ごとに丁度僕等人間のように前や後ろを具（そな）えていた。それもまた僕には不快よりも恐怖に近いものを運んで来た。僕はダンテの地獄の中にある、樹木になった魂を思い出し、ビルディングばかり並んでいる電車線路の向うを歩くことにした。しかしそこも一町とは無事に歩くことは出来なかった。

「ちょっと通りがかりに失礼ですが、……」

それは金鈕（きんボタン）の制服を着た二十二三の青年だった。

僕は黙ってこの青年を見つめ、彼の鼻の左の側（わき）に黒子（ほくろ）のあることを発見した。彼は帽を脱いだまま、怯（お）ず怯ずこう僕に話しかけた。

「Aさんではいらっしゃいませんか？」

「そうです」

「どうもそんな気がしたものですから、……」

「何か御用ですか？」

「いえ、唯お目にかかりたかっただけです。僕も先生の愛読者の……」

僕はもうその時にはちょっと帽をとったぎり、彼を後ろに歩き出していた。先生、A先生、――それは僕にはこの頃で最も不快な言葉だった。僕はあらゆる罪悪を犯していることを信じていた。しかも彼等は何かの機会に僕を先生と呼びつづけていた。僕はそこに僕を嘲(あざけ)る何ものかを感じずにはいられなかった。何ものかを?――しかし僕の物質主義は神秘主義を拒絶せずにはいられなかった。僕はつい二三箇月前にも或小さい同人雑誌にこう云う言葉を発表していた。――

「僕は芸術的良心を始め、どう云う良心も持っていない。僕の持っているのは神経だけである」……

姉は三人の子供たちと一しょに露地の奥のバラックに避難していた。褐色の紙を貼ったバラックの中は外よりも寒いくらいだった。僕等は火鉢に手をかざしながら、いろいろのことを話し合った。体の逞（たくま）しい姉の夫は人一倍痩（や）せ細った僕を本能的に軽蔑（けいべつ）していた。のみならず僕の作品の不道徳であることを公言していた。僕はいつも冷やかにこう云う彼を見おろしたまま、一度も打ちとけて話したことはなかった。しかし姉と話しているうちにだんだん彼も僕のように地獄に堕ちていたことを悟り出した。彼は現に寝台車の中に幽霊を見たとか云うことだった。が、僕は巻煙草に火をつ

け、努めて金のことばかり話しつづけた。

「何しろこう云う際だしするから、何もかも売ってしまおうと思うの」

「それはそうだ。タイプライタアなどは幾らかになるだろう」

「ええ、それから画などもあるし」

「次手にNさん（姉の夫）の肖像画も売るか？　しかしあれは……」

僕はバラックの壁にかけた、額縁のない一枚のコンテ画を見ると、迂闊に常談も言われないのを感じた。轢死した彼は汽車の為に顔もすっかり肉塊になり、僅

かに唯口髭（くちひげ）だけ残っていたとか云うことだった。この話は勿論話自身も薄気味悪いのに違いなかった。しかし彼の肖像画はどこも完全に描いてあるものの、口髭だけはなぜかぼんやりしていた。僕は光線の加減かと思い、この一枚のコンテ画をいろいろの位置から眺めるようにした。

「何をしているの？」

「何でもないよ。……唯あの肖像画は口のまわりだけ、……」

姉はちょっと振り返りながら、何も気づかないように返事をした。

「髭だけ妙に薄いようでしょう」

　僕の見たものは錯覚ではなかった。しかし錯覚ではないとすれば、——僕は午飯（ひるめし）の世話にならないうちに姉の家を出ることにした。

「まあ、善いでしょう」

「又あしたでも、……きょうは青山まで出かけるのだから」

「ああ、あすこ？　まだ体の具合は悪いの？」

「やっぱり薬ばかり嚥（の）んでいる。催眠薬だけでも大変だよ。ヴェロナアル、ノイロナアル、トリオナアル、ヌマアル……」

三十分ばかりたった後、僕は或ビルディングへはいり、昇降機（リフト）に乗って三階へのぼった。それから或レストオランの硝子戸を押してはいろうとした。が、硝子戸は動かなかった。のみならずそこには「定休日」と書いた漆塗りの札も下っていた。僕は愈（いよいよ）不快になり、硝子戸の向うのテエブルの上に林檎（りんご）やバナナを盛ったのを見たまま、もう一度往来へ出ることにした。すると会社員らしい男が二人何か快活にしゃべりながら、このビルディングにはいる為に僕の肩をこすって行った。彼等の一人はその拍子に「イライラしてね」と言ったらしかった。

僕は往来に佇(たたず)んだなり、タクシイの通るのを待ち合せていた。タクシイは容易に通らなかった。のみならずたまに通ったのは必ず黄いろい車だった。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としていた）そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、とにかく青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。

「イライラする、――tantalizing――Tantalus――Inferno……」

タンタルスは実際硝子戸越しに果物を眺めた僕自身だった。僕は二度も僕の目に浮んだダンテの地獄を詛(のろ)

いながら、じっと運転手の背中を眺めていた。そのうちに又あらゆるものの譃であることを感じ出した。政治、実業、芸術、科学、——いずれも皆こう云う僕にはこの恐しい人生を隠した雑色のエナメルに外ならなかった。僕はだんだん息苦しさを感じ、タクシイの窓をあけ放ったりした。が、何か心臓をしめられる感じは去らなかった。

緑いろのタクシイはやっと神宮前へ走りかかった。そこには或精神病院へ曲る横町が一つある筈だった。しかしそれもきょうだけはなぜか僕にはわからなかった。僕は電車の線路に沿い、何度もタクシイを往復さ

せた後、とうとうあきらめておりることにした。

僕はやっとその横町を見つけ、ぬかるみの多い道を曲って行った。するといつか道を間違え、青山斎場の前へ出てしまった。それはかれこれ十年前にあった夏目先生の告別式以来、一度も僕は門の前さえ通ったことのない建物だった。十年前（ぜん）の僕も幸福ではなかった。しかし少くとも平和だった。僕は砂利を敷いた門の中を眺め、「漱石（そうせき）山房」の芭蕉（ばしょう）を思い出しながら、何か僕の一生も一段落ついたことを感じない訣には行かなかった。のみならずこの墓地の前へ十年目に僕をつれて来た何ものかを感じない訣にも行かなかった。

　或精神病院の門を出た後、僕は又自動車に乗り、前のホテルへ帰ることにした。が、このホテルの玄関へおりると、レエン・コオトを着た男が一人何か給仕と喧嘩（けんか）をしていた。給仕と？――いや、それは給仕ではない、緑いろの服を着た自動車掛りだった。僕はこのホテルへはいることに何か不吉な心もちを感じ、さっさともとの道を引き返して行った。

　僕の銀座通りへ出た時にはかれこれ日の暮も近づいていた。僕は両側に並んだ店や目まぐるしい人通りに一層憂鬱にならずにはいられなかった。殊に往来の人々の罪などと云うものを知らないように軽快に歩い

ているのは不快だった。僕は薄明るい外光に電燈の光のまじった中をどこまでも北へ歩いて行った。そのうちに僕の目を捉(とら)えたのは雑誌などを積み上げた本屋だった。僕はこの本屋の店へはいり、ぼんやりと何段かの書棚を見上げた。それから「希臘(ギリシャ)神話」と云う一冊の本へ目を通すことにした。黄いろい表紙をした「希臘神話」は子供の為に書かれたものらしかった。けれども偶然僕の読んだ一行は忽ち僕を打ちのめした。

「一番偉いツォイスの神でも復讐(ふくしゅう)の神にはかないません。……」

僕はこの本屋の店を後ろに人ごみの中を歩いて行っ

た。いつか曲り出した僕の背中に絶えず僕をつけ狙っている復讐の神を感じながら。……

三　夜

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「伝説」を見つけ、二三頁ずつ目を通した。それは僕の経験と大差のないことを書いたものだった。のみならず黄いろい表紙をしていた。僕は「伝説」を書棚へ戻し、今度は殆ど手当り次第に厚い本を一冊引きずり出した。しかしこの本も挿し画の一枚に僕等人間と変りのない、

目鼻のある歯車ばかり並べていた。（それは或独逸（ドイツ）人の集めた精神病者の画集だった）僕はいつか憂鬱の中に反抗的精神の起るのを感じ、やぶれかぶれになった賭博狂（とばくきょう）のようにいろいろの本を開いて行った。が、なぜかどの本も必ず文章か挿し画かの中に多少の針を隠していた。どの本も？——僕は何度も読み返した「マダム・ボヴァリイ」を手にとった時さえ、畢竟（ひっきょう）僕自身も中産階級のムッシウ・ボヴァリイに外ならないのを感じた。……

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかった。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよって

行った。それから「宗教」と云う札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵、――疑惑、恐怖、驕慢（きょうまん）、官能的欲望」と云う言葉を並べていた。僕はこう云う言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかった。が、伝統的精神もやはり近代的精神のようにやはり僕を不幸にするのは愈（いよいよ）僕にはたまらなかった。僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン・ネエムに用いた「寿陵余子（じゅりょうよし）」と云う言葉を思い出した。それは

邯鄲（かんたん）の歩みを学ばないうちに寿陵の歩みを忘れてしまい、蛇行匍匐（だこうほふく）して帰郷したと云う「韓非子（かんぴし）」中の青年だった。今日（こんにち）の僕は誰の目にも「寿陵余子」であるのに違いなかった。しかしまだ地獄へ堕ちなかった僕もこのペン・ネエムを用いていたことは、――僕は大きい書棚を後ろに努めて妄想を払うようにし、丁度僕の向うにあったポスタアの展覧室へはいって行った。が、そこにも一枚のポスタアの中には聖ジョオジらしい騎士が一人翼のある竜を刺し殺していた。しかもその騎士は兜（かぶと）の下に僕の敵の一人に近いしかめ面を半ば露（あらわ）していた。僕は又「韓非子」の中の屠竜（とりゅう）の技の話を思

い出し、展覧室へ通りぬけずに幅の広い階段を下って行った。

　僕はもう夜になった日本橋通りを歩きながら、屠竜と云う言葉を考えつづけた。それは又僕の持っている硯（すずり）の銘にも違いなかった。この硯を僕に贈ったのは或若い事業家だった。彼はいろいろの事業に失敗した揚句、とうとう去年の暮に破産してしまった。僕は高い空を見上げ、無数の星の光の中にどのくらいこの地球の小さいかと云うことを、――従ってどのくらい僕自身の小さいかと云うことを考えようとした。しかし昼間は晴れていた空もいつかもうすっかり曇っていた。

僕は突然何ものかの僕に敵意を持っているのを感じ、電車線路の向うにある或カッフェへ避難することにした。

それは「避難」に違いなかった。僕はこのカッフェの薔薇(ばら)色の壁に何か平和に近いものを感じ、一番奥のテエブルの前にやっと楽々と腰をおろした。そこには幸い僕の外に二三人の客のあるだけだった。僕は一杯のココアを啜(すす)り、ふだんのように巻煙草をふかし出した。巻煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに青い煙を立ちのぼらせて行った。この優しい色の調和もやはり僕には愉快だった。けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁

にかけたナポレオンの肖像画を見つけ、そろそろ又不安を感じ出した。ナポレオンはまだ学生だった時、彼の地理のノオト・ブックの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記していた。それは或は僕等の言うように偶然だったかも知れなかった。しかしナポレオン自身にさえ恐怖を呼び起したのは確かだった。……

僕はナポレオンを見つめたまま、僕自身の作品を考え出した。するとまず記憶に浮かんだのは「侏儒の言葉」の中のアフォリズムだった。（殊に「人生は地獄よりも地獄的である」と云う言葉だった）それから「地獄変」の主人公、――良秀と云う画師の運命だった。

それから……僕は巻煙草をふかしながら、こう云う記憶から逃（のが）れる為にこのカッフェの中を眺めまわした。僕のここへ避難したのは五分もたたない前のことだった。しかしこのカッフェは短時間の間にすっかり容子（ようす）を改めていた。就中（なかんずく）僕を不快にしたのはマホガニイまがいの椅子やテエブルの少しもあたりの薔薇色の壁と調和を保っていないことだった。僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ、銀貨を一枚投げ出すが早いか、匆々（そうそう）このカッフェを出ようとした。

「もし、もし、二十銭頂きますが、……」

僕の投げ出したのは銅貨だった。

僕は屈辱を感じながら、ひとり往来を歩いているうちにふと遠い松林の中にある僕の家を思い出した。それは或郊外にある僕の養父母の家ではない、唯僕を中心にした家族の為に借りた家だった。僕はかれこれ十年前（ぜん）にもこう云う家に暮らしていた。しかし或事情の為に軽率にも父母と同居し出した。同時に又奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に変り出した。……

前のホテルに帰ったのはもうかれこれ十時だった。ずっと長い途（みち）を歩いて来た僕は僕の部屋へ帰る力を失い、太い丸太の火を燃やした炉の前の椅子に腰をおろ

した。それから僕の計画していた長篇のことを考え出した。それは推古から明治に至る各時代の民を主人公にし、大体三十余りの短篇を時代順に連ねた長篇だった。僕は火の粉の舞い上るのを見ながら、ふと宮城の前にある或銅像を思い出した。この銅像は甲冑（かっちゅう）を着、忠義の心そのもののように高だかと馬の上に跨（また）がっていた。しかし彼の敵だったのは、――

「譃（うそ）！」

僕は又遠い過去から目近（まぢか）い現代へすべり落ちた。そこへ幸いにも来合せたのは或先輩の彫刻家だった。彼は不相変（あいかわらず）天鵞絨（びろうど）の服を着、短い山羊髯（やぎひげ）を反（そ）らせていた。

僕は椅子から立ち上り、彼のさし出した手を握った。（それは僕の習慣ではない、パリやベルリンに半生を送った彼の習慣に従ったのだった）が、彼の手は不思議にも爬虫類（はちゅうるい）の皮膚のように湿っていた。

「君はここに泊っているのですか？」

「ええ、……」

「仕事をしに？」

「ええ、仕事もしているのです」

彼はじっと僕の顔を見つめた。僕は彼の目の中に探偵に近い表情を感じた。

「どうです、僕の部屋へ話しに来ては？」

僕は挑戦的に話しかけた。（この勇気に乏しい癖に忽ち挑戦的態度をとるのは僕の悪癖の一つだった）すると彼は微笑しながら、「どこ、君の部屋は？」と尋ね返した。

僕等は親友のように肩を並べ、静かに話している外国人たちの中を僕の部屋へ帰って行った。彼は僕の部屋へ来ると、鏡を後ろにして腰をおろした。それからいろいろのことを話し出した。いろいろのことを？——しかし大抵は女の話だった。僕は罪を犯した為に地獄に堕ちた一人に違いなかった。が、それだけに悪徳の話は愈僕を憂鬱にした。僕は一時的清教徒になり、

それ等の女を嘲(あざけ)り出した。

「S子さんの唇(くちびる)を見給え。あれは何人もの接吻の為に……」

僕はふと口を噤(つぐ)み、鏡の中に彼の後ろ姿を見つめた。彼は丁度耳の下に黄いろい膏薬(こうやく)を貼(は)りつけていた。

「何人もの接吻の為に？」

「そんな人のように思いますがね」

彼は微笑して頷(うなず)いていた。僕は彼の内心では僕の秘密を知る為に絶えず僕を注意しているのを感じた。けれどもやはり僕等の話は女のことを離れなかった。僕は彼を憎むよりも僕自身の気の弱いのを恥じ、愈憂

鬱にならずにはいられなかった。

やっと彼の帰った後、僕はベッドの上に転がったまま、「暗夜行路」を読みはじめた。主人公の精神的闘争は一々僕には痛切だった。僕はこの主人公に比べると、どのくらい僕の阿呆（あほう）だったかを感じ、いつか涙を流していた。同時に又涙は僕の気もちにいつか平和を与えていた。が、それも長いことではなかった。僕の右の目はもう一度半透明の歯車を感じ出した。歯車はやはりまわりながら、次第に数を殖やして行った。僕は頭痛のはじまることを恐れ、枕もとに本を置いたまま、○・八グラムのヴェロナアルを嚥（の）み、とにかくぐっす

り眠ることにした。

けれども僕は夢の中に或プウルを眺めていた。そこには又男女(なんにょ)の子供たちが何人も泳いだりもぐったりしていた。僕はこのプウルを後ろに向うの松林へ歩いて行った。すると誰か後ろから「おとうさん」と僕に声をかけた。僕はちょっとふり返り、プウルの前に立った妻を見つけた。同時に又烈しい後悔を感じた。

「おとうさん、タオルは？」

「タオルはいらない。子供たちに気をつけるのだよ」

僕は又歩みをつづけ出した。が、僕の歩いているのはいつかプラットフォオムに変っていた。それは田舎

の停車場だったと見え、長い生け垣のあるプラットフォオムだった。そこには又Hと云う大学生や年をとった女も佇んでいた。彼等は僕の顔を見ると、僕の前に歩み寄り、口々に僕へ話しかけた。

「大火事でしたわね」

「僕もやっと逃げて来たの」

僕はこの年をとった女に何か見覚えのあるように感じた。のみならず彼女と話していることに或愉快な興奮を感じた。そこへ汽車は煙をあげながら、静かにプラットフォオムへ横づけになった。僕はひとりこの汽車に乗り、両側に白い布を垂らした寝台の間を歩いて

行った。すると或寝台の上にミイラに近い裸体の女が一人こちらを向いて横になっていた。それは又僕の復讐の神、——或狂人の娘に違いなかった。……

僕は目を醒(さ)ますが早いか、思わずベッドを飛び下りていた。僕の部屋は不相変電燈の光に明るかった。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えていた。僕は戸をあけて廊下へ出、前の炉の前へ急いで行った。それから椅子に腰をおろしたまま、覚束(おぼつか)ない炎を眺め出した。そこへ白い服を着た給仕が一人焚(た)き木を加えに歩み寄った。

「何時？」

「三時半ぐらいでございます」

しかし向うのロッビイの隅には亜米利加人らしい女が一人何か本を読みつづけた。彼女の着ているのは遠目に見ても緑いろのドレッスに違いなかった。僕は何か救われたのを感じ、じっと夜のあけるのを待つことにした。長年の病苦に悩み抜いた揚句、静かに死を待っている老人のように。……

四　まだ？

僕はこのホテルの部屋にやっと前の短篇を書き上げ、

或雑誌に送ることにした。尤も僕の原稿料は一週間の滞在費にも足りないものだった。が、僕は僕の仕事を片づけたことに満足し、何か精神的強壮剤を求める為に銀座の或本屋へ出かけることにした。

　冬の日の当ったアスファルトの上には紙屑が幾つもころがっていた。それらの紙屑は光の加減か、いずれも薔薇の花にそっくりだった。僕は何ものかの好意を感じ、その本屋の店へはいって行った。そこもまたふだんよりも小綺麗だった。唯目金をかけた小娘が一人何か店員と話していたのは僕には気がかりにならないこともなかった。けれども僕は往来に落ちた紙屑の薔

薇の花を思い出し、「アナトオル・フランスの対話集」や「メリメエの書簡集」を買うことにした。

僕は二冊の本を抱え、或カッフェへはいって行った。それから一番奥のテエブルの前に珈琲（コーヒー）の来るのを待つことにした。僕の向うには親子らしい男女（なんにょ）が二人坐っていた。その息子は僕よりも若かったものの、殆ど僕にそっくりだった。のみならず彼等は恋人同志のように顔を近づけて話し合っていた。僕は彼等を見ているうちに少くとも息子は性的にも母親に慰めを与えていることを意識しているのに気づき出した。それは僕にも覚えのある親和力の一例に違いなかった。同時に又

現世（げんぜ）を地獄にする或意志の一例にも違いなかった。しかし、――僕は又苦しみに陥るのを恐れ、丁度珈琲の来たのを幸い、「メリメエの書簡集」を読みはじめた、彼はこの書簡集の中にも彼の小説の中のように鋭いアフォリズムを閃（ひらめ）かせていた。それ等のアフォリズムは僕の気もちをいつか鉄のように巌畳（がんじょう）にし出した。（この影響を受け易いことも僕の弱点の一つだった）僕は一杯の珈琲を飲み了（おわ）った後（のち）、「何でも来い」と云う気になり、さっさとこのカッフェを後ろにして行った。

僕は往来を歩きながら、いろいろの飾り窓を覗（のぞ）いて行った。或額縁屋の飾り窓はベエトオヴェンの肖像画

を掲げていた。それは髪を逆立てた天才そのものらしい肖像画だった。僕はこのベエトオヴェンを滑稽に感ぜずにはいられなかった。……

そのうちにふと出合ったのは高等学校以来の旧友だった。この応用化学の大学教授は大きい中折れ鞄を抱え、片目だけまっ赤に血を流していた。

「どうした、君の目は？」

「これか？　これは唯の結膜炎さ」

僕はふと十四五年以来、いつも親和力を感じる度に僕の目も彼の目のように結膜炎を起すのを思い出した。が、何とも言わなかった。彼は僕の肩を叩き、僕等の

友だちのことを話し出した。それから話をつづけたま
ま、或カッフェへ僕をつれて行った。
「久しぶりだなあ。朱舜水（しゅしゅんすい）の建碑式以来だろう」
彼は葉巻に火をつけた後、大理石のテエブル越しに
こう僕に話しかけた。
「そうだ。あのシュシュン……」
僕はなぜか朱舜水と云う言葉を正確に発音出来な
かった。それは日本語だっただけにちょっと僕を不安
にした。しかし彼は無頓着にいろいろのことを話して
行った。Ｋと云う小説家のことを、彼の買ったブル・
ドッグのことを、リウイサイトと云う毒瓦斯（ガス）のことを。

……

「君はちっとも書かないようだね。『点鬼簿』と云うのは読んだけれども。……あれは君の自叙伝かい？」

「うん、僕の自叙伝だ」

「あれはちょっと病的だったぜ。この頃体は善いのかい？」

「不相変薬ばかり嚥んでいる始末だ」

「僕もこの頃は不眠症だがね」

「僕も？――どうして君は『僕も』と言うのだ？」

「だって君も不眠症だって言うじゃないか？　不眠症は危険だぜ。……」

彼は左だけ充血した目に微笑に近いものを浮かべていた。僕は返事をする前に「不眠症」のショウの発音を正確に出来ないのを感じ出した。

「気違いの息子には当り前だ」

僕は十分とたたないうちにひとり又往来を歩いて行った。アスファルトの上に落ちた紙屑は時々僕等人間の顔のようにも見えないことはなかった。すると向うから断髪にした女が一人通りかかった。彼女は遠目には美しかった。けれども目の前へ来たのを見ると、小皺のある上に醜い顔をしていた。のみならず妊娠していたらしかった。僕は思わず顔をそむけ、広い横町

を曲って行った。が、暫らく歩いているうちに痔の痛みを感じ出した。それは僕には坐浴より外に癒すことの出来ない痛みだった。

「坐浴、――ベエトオヴェンもやはり坐浴をしていた。……」

坐浴に使う硫黄の匂いは忽ち僕の鼻を襲い出した。しかし勿論往来にはどこにも硫黄は見えなかった。僕はもう一度紙屑の薔薇の花を思い出しながら、努めてしっかりと歩いて行った。

一時間ばかりたった後、僕は僕の部屋にとじこもったまま、窓の前の机に向かい、新らしい小説にとりか

かっていた。ペンは僕にも不思議だったくらい、ずんずん原稿用紙の上を走って行った。しかしそれも二三時間の後には誰か僕の目に見えないものに抑えられたようにとまってしまった。僕はやむを得ず机の前を離れ、あちこちと部屋の中を歩きまわった。僕の誇大妄想(もうぞう)はこう云う時に最も著しかった。僕は野蛮な歓びの中に僕には両親もなければ妻子もない、唯僕のペンから流れ出した命だけあると云う気になっていた。

　けれども僕は四五分の後、電話に向わなければならなかった。電話は何度返事をしても、唯何か曖昧(あいまい)な言葉を繰り返して伝えるばかりだった。が、それはとも

かくもモオルと聞えたのに違いなかった。僕はとうとう電話を離れ、もう一度部屋の中を歩き出した。しかしモオルと云う言葉だけは妙に気になってならなかった。

「モオル――Mole……」

モオルは鼹鼠（もぐらもち）と云う英語だった。この聯想（れんそう）も僕には愉快ではなかった。が、僕は二三秒の後、Mole を la mort に綴り直した。ラ・モオルは、――死と云う仏蘭西語は忽ち僕を不安にした。死は姉の夫に迫っていたように僕にも迫っているらしかった。けれども僕は不安の中にも何か可笑（おか）しさを感じていた。のみなら

ずいつか微笑していた。この可笑しさは何の為に起るか？――それは僕自身にもわからなかった。僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向い合った。僕の影も勿論（もちろん）微笑していた。僕はこの影を見つめているうちに第二の僕のことを思い出した。第二の僕、――独逸人の所謂（いわゆる）Doppel gaenger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかった。しかし亜米利加の映画俳優になったＫ君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけていた。（僕は突然Ｋ君の夫人に「先達（せんだって）はつい御挨拶もしませんで」と言われ、当惑したことを覚えている）それからもう故人になった或隻脚（かたあし）の飜訳家もやはり銀

座の或煙草屋に第二の僕を見かけていた。死は或は僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかった。若し又僕に来たとしても、――僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ帰って行った。

四角に凝灰岩を組んだ窓は枯芝や池を覗かせていた。僕はこの庭を眺めながら、遠い松林の中に焼いた何冊かのノオト・ブックや未完成の戯曲を思い出した。それからペンをとり上げると、もう一度新らしい小説を書きはじめた。

五　赤光

　日の光は僕を苦しめ出した。僕は実際鼹鼠のように窓の前へカアテンをおろし、昼間も電燈をともしたまま、せっせと前の小説をつづけて行った。それから仕事に疲れると、テエヌの英吉利文学史をひろげ、詩人たちの生涯に目を通した。彼等はいずれも不幸だった。エリザベス朝の巨人たちさえ、――一代の学者だったベン・ジョンソンさえ彼の足の親指の上に羅馬（ローマ）とカルセエジとの軍勢の戦いを始めるのを眺めたほど神経的疲労に陥っていた。僕はこう云う彼等の不幸に残酷な悪意に充ち満ちた歓びを感じずにはいられなかった。

　或東かぜの強い夜、（それは僕には善い徴（しるし）だった）僕は地下室を抜けて往来へ出、或老人を尋ねることにした。彼は或聖書会社の屋根裏にたった一人小使いをしながら、祈禱や読書に精進していた。僕等は火鉢に手をかざしながら、壁にかけた十字架の下にいろいろのことを話し合った。なぜ僕の母は発狂したか？　なぜ僕の父の事業は失敗したか？　なぜ又僕は罰せられたか？――それ等の秘密を知っている彼は妙に厳（おごそ）かな微笑を浮かべ、いつまでも僕の相手をした。のみならず時々短い言葉に人生のカリカテュアを描いたりした。僕はこの屋根裏の隠者を尊敬しない訣（わけ）には行かな

かった。しかし彼と話しているうちに彼もまた親和力の為に動かされていることを発見した。――

「その植木屋の娘と云うのは器量も善いし、気立も善いし、――それはわたしに優しくしてくれるのです」

「いくつ？」

「ことしで十八です」

それは彼には父らしい愛であるかも知れなかった。しかし僕は彼の目の中に情熱を感じずにはいられなかった。のみならず彼の勧めた林檎はいつか黄ばんだ皮の上へ一角獣の姿を現していた。（僕は木目や珈琲茶碗の亀裂に度たび神話的動物を発見していた）一角

獣は麒麟（きりん）に違いなかった。僕は或敵意のある批評家の僕を「九百十年代の麒麟児」と呼んだのを思い出し、この十字架のかかった屋根裏も安全地帯ではないことを感じた。

「如何（いかが）ですか、この頃は？」

「不相変神経ばかり苛々（いらいら）してね」

「それは薬でも駄目ですよ。信者になる気はありませんか？」

「若し僕でもなれるものなら……」

「何もむずかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督（キリスト）を信じ、基督の行った奇蹟（きせき）を信じさえすれ

ば……」
「悪魔を信じることは出来ますがね。……」
「ではなぜ神を信じないのです？　若し影を信じるならば、光も信じずにはいられないでしょう？」
「しかし光のない暗（やみ）もあるでしょう」
「光のない暗とは？」
　僕は黙るより外はなかった。彼もまた僕のように暗の中を歩いていた。が、暗のある以上は光もあると信じていた。僕等の論理の異るのは唯こう云う一点だけだった。しかしそれは少くとも僕には越えられない溝（みぞ）に違いなかった。……

「けれども光は必ずあるのです。その証拠には奇蹟があるのですから。……奇蹟などと云うものは今でも度たび起っているのですよ」
「それは悪魔の行う奇蹟は。……」
「どうして又悪魔などと云うのです？」
僕はこの一二年の間、僕自身の経験したことを彼に話したい誘惑を感じた。が、彼から妻子に伝わり、僕もまた母のように精神病院にはいることを恐れない訣にも行かなかった。
「あすこにあるのは？」
この逞（たくま）しい老人は古い書棚をふり返り、何か

牧羊神らしい表情を示した。
「ドストエフスキイ全集です。『罪と罰』はお読みですか？」
僕は勿論十年前にも四五冊のドストエフスキイに親しんでいた。が、偶然（？）彼の言った『罪と罰』と云う言葉に感動し、この本を貸して貰った上、前のホテルへ帰ることにした。電燈の光に輝いた、人通りの多い往来はやはり僕には不快だった。殊に知り人に遇うことは到底堪えられないのに違いなかった。僕は努めて暗い往来を選び、盗人のように歩いて行った。
しかし僕は暫らくの後、いつか胃の痛みを感じ出し

た。この痛みを止めるものは一杯のウイスキイのあるだけだった。僕は或バアを見つけ、その戸を押してはいろうとした。けれども狭いバアの中には煙草の煙の立ちこめた中に芸術家らしい青年たちが何人も群がって酒を飲んでいた。のみならず彼等のまん中には耳隠しに結った女が一人熱心にマンドリンを弾(ひ)きつづけていた。僕は忽ち当惑を感じ、戸の中へはいらずに引き返した。するといつか僕の影の左右に揺れているのを発見した。しかも僕を照らしているのは無気味にも赤い光だった。僕は往来に立ちどまった。けれども僕の影は前のように絶えず左右に動いていた。僕は怯(お)ず怯

ずふり返り、やっとこのバアの軒に吊（つ）った色硝子（ガラス）のランタアンを発見した。ランタアンは烈しい風の為に徐（おもむ）ろに空中に動いていた。……

　僕の次にはいったのは或地下室のレストオランだった。僕はそこのバアの前に立ち、ウイスキイを一杯註文した。

「ウイスキイを？　Black and White ばかりでございますが、……」

　僕は曹達水（ソオダ）の中にウイスキイを入れ、黙って一口ずつ飲みはじめた。僕の鄰（となり）には新聞記者らしい三十前後の男が二人何か小声に話していた。のみならず仏蘭

西語を使っていた。僕は彼等に背中を向けたまま、全身に彼等の視線を感じた。それは実際電波のように僕の体にこたえるものだった。彼等は確かに僕の名を知り、僕の噂をしているらしかった。

「Bien …… très mauvais …… pourquoi ?……」

「Pourquoi ?…… le diable est mort !……」

「Oui, oui …… d'enfer ……」

僕は銀貨を一枚投げ出し、(それは僕の持っている最後の一枚の銀貨だった)この地下室の外へのがれることにした。夜風の吹き渡る往来は多少胃の痛みの薄らいだ僕の神経を丈夫にした。僕はラスコルニコフを

思い出し、何ごとも懺悔（ざんげ）したい欲望を感じた。が、それは僕自身の外にも、――いや、僕の家族の外にも悲劇を生じるのに違いなかった。のみならずこの欲望さえ真実かどうかは疑わしかった。若し僕の神経さえ常人のように丈夫になれば、――けれども僕はその為にはどこかへ行かなければならなかった。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、……

　そのうちに或店の軒に吊った、白い小型の看板は突然僕を不安にした。それは自動車のタイアアに翼のある商標を描いたものだった。僕はこの商標に人工の翼を手（た）よりにした古代の希臘人を思い出した。彼は空中

に舞い上った揚句、太陽の光に翼を焼かれ、とうとう海中に溺死していた。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、――僕はこう云う僕の夢を嘲笑わない訣には行かなかった。同時に又復讐の神に追われたオレステスを考えない訣にも行かなかった。

僕は運河に沿いながら、暗い往来を歩いて行った。そのうちに或郊外にある養父母の家を思い出した。養父母は勿論僕の帰るのを待ち暮らしているのに違いなかった。恐らくは僕の子供たちも、――しかし僕はそこへ帰ると、おのずから僕を束縛してしまう或力を恐れずにはいられなかった。運河は波立った水の上に

達磨船（だるまぶね）を一艘（いっそう）横づけにしていた。その又達磨船は船の底から薄い光を洩らしていた。そこにも何人かの男女（なんにょ）の家族は生活しているのに違いなかった。やはり愛し合う為に憎み合いながら。……が、僕はもう一度戦闘的精神を呼び起し、ウイスキイの酔いを感じたまま、前のホテルへ帰ることにした。

　僕は又机に向い、「メリメエの書簡集」を読みつづけた。それは又いつの間にか僕に生活力を与えていた。しかし僕は晩年のメリメエの新教徒になっていたことを知ると、俄（にわ）かに仮面のかげにあるメリメエの顔を感じ出した。彼もまたやはり僕等のように暗の中を歩い

ている一人だった。暗の中を？——「暗夜行路」はこう云う僕には恐しい本に変りはじめた。僕は憂鬱を忘れる為に「アナトオル・フランスの対話集」を読みはじめた。が、この近代の牧羊神もやはり十字架を荷（にな）っていた。……

一時間ばかりたった後、給仕は僕に一束の郵便物を渡しに顔を出した。それ等の一つはライプツィッヒの本屋から僕に「近代の日本の女」と云う小論文を書けと云うものだった。なぜ彼等は特に僕にこう云う小論文を書かせるのであろう？　のみならずこの英語の手紙は「我々は丁度日本画のように黒と白の外に色彩の

ない女の肖像画でも満足である」と云う肉筆のＰ・Ｓを加えていた。僕はこう云う一行にBlack and Whiteと云うウイスキイの名を思い出し、ずたずたにこの手紙を破ってしまった。それから今度は手当り次第に一つの手紙の封を切り、黄いろい書簡箋に目を通した。この手紙を書いたのは僕の知らない青年だった。しかし二三行も読まないうちに「あなたの『地獄変』は……」と云う言葉は僕を苛立たせずには措かなかった。三番目に封を切った手紙は僕の甥から来たものだった。僕はやっと一息つき、家事上の問題などを読んで行った。けれどもそれさえ最後へ来ると、いきなり僕を打

ちのめした。

「歌集『赤光』の再版を送りますから……」

赤光！　僕は何ものかの冷笑を感じ、僕の部屋の外へ避難することにした。廊下には誰も人かげはなかった。僕は片手に壁を抑え、やっとロッビイへ歩いて行った。それから椅子に腰をおろし、とにかく巻煙草に火を移すことにした。巻煙草はなぜかエエア・シップだった。（僕はこのホテルへ落ち着いてから、いつもスタアばかり吸うことにしていた）人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した。僕は向うにいる給仕を呼び、スタアを二箱貰うことにした。しかし給仕を

信用すれば、スタアだけは生憎（あいにく）品切れだった。

「エエア・シップならばございますが、……」

僕は頭を振ったまま、広いロッビイを眺めまわした。僕の向うには外国人が四五人テエブルを囲んで話していた。しかも彼等の中の一人、——赤いワン・ピイスを着た女は小声に彼等と話しながら、時々僕を見ているらしかった。

「Mrs. Townshead ……」

何か僕の目に見えないものはこう僕に囁（ささや）いて行った。ミセス・タウンズヘッドなどと云う名は勿論僕の知らないものだった。たとい向うにいる女の名にして

も、――僕は又椅子から立ち上り、発狂することを恐れながら、僕の部屋へ帰ることにした。

　僕は僕の部屋へ帰ると、すぐに或精神病院へ電話をかけるつもりだった。が、そこへはいることは僕には死ぬことに変らなかった。僕はさんざんためらった後、この恐怖を紛らす為に「罪と罰」を読みはじめた。しかし偶然開いた頁は「カラマゾフ兄弟」の一節だった。僕は本を間違えたのかと思い、本の表紙へ目を落した。「罪と罰」――本は「罪と罰」に違いなかった。僕はこの製本屋の綴（と）じ違えに、――その又綴じ違えた頁を開いたことに運命の指の動いているのを感じ、やむを得

ずそこを読んで行った。けれども一頁も読まないうちに全身が震えるのを感じ出した。そこは悪魔に苦しめられるイヴァンを描いた一節だった。イヴァンを、ストリントベルグを、モオパスサンを、或はこの部屋にいる僕自身を。……

　こう云う僕を救うものは唯眠りのあるだけだった。しかし催眠剤はいつの間にか一包みも残らずになくなっていた。僕は到底眠らずに苦しみつづけるのに堪えなかった。が、絶望的な勇気を生じ、珈琲（コーヒー）を持って来て貰った上、死にもの狂いにペンを動かすことにした。二枚、五枚、七枚、十枚、――原稿は見る見る出

来上って行った。僕はこの小説の世界を超自然の動物に満たしていた。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像画を描いていた。けれども疲労は徐（おもむ）ろに僕の頭を曇らせはじめた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上へ仰向けになった。それから四五十分間は眠ったらしかった。しかし又誰か僕の耳にこう云う言葉を囁いたのを感じ、忽ち目を醒まして立ち上った。

「Le diable est mort」

凝灰岩の窓の外はいつか冷えびえと明けかかっていた。僕は丁度戸の前に佇み、誰もいない部屋の中を眺めまわした。すると向うの窓硝子は斑（まだ）らに外気に曇っ

た上に小さい風景を現していた。それは黄ばんだ松林の向うに海のある風景に違いなかった。僕は怯ず怯ず窓の前へ近づき、この風景を造っているものは実は庭の枯芝や池だったことを発見した。けれども僕の錯覚はいつか僕の家に対する郷愁に近いものを呼び起していた。

僕は九時にでもなり次第、或雑誌社へ電話をかけ、とにかく金の都合をした上、僕の家へ帰る決心をした。机の上に置いた鞄（かばん）の中へ本や原稿を押しこみながら。

六　飛行機

僕は東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした。運転手はなぜかこの寒さに古いレエン・コオトをひっかけていた。僕はこの暗合を無気味に思い、努めて彼を見ないように窓の外へ目をやることにした。すると低い松の生えた向うに、――恐らくは古い街道に葬式が一列通るのをみつけた。白張（しらは）りの提灯（ちょうちん）や竜燈（りゅうとう）はその中に加わってはいないらしかった。が、金銀の造花の蓮は静かに輿（こし）の前後に揺（ゆら）いで行った。……

やっと僕の家へ帰った後（のち）、僕は妻子や催眠薬の力に

より、二三日は可也（かなり）平和に暮らした。僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせていた。僕はこの二階の机に向かい、鳩の声を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉（からす）の外に雀も縁側へ舞いこんだりした。それもまた僕には愉快だった。「喜雀堂（きじゃくどう）に入る」――僕はペンを持ったまま、その度にこんな言葉を思い出した。

　或生暖かい曇天の午後、僕は或雑貨店へインクを買いに出かけて行った。するとその店に並んでいるのはセピア色のインクばかりだった。セピア色のインクはどのインクよりも僕を不快にするのを常としていた。

僕はやむを得ずこの店を出、人通りの少ない往来をぶらぶらひとり歩いて行った。そこへ向うから近眼らしい四十前後の外国人が一人肩を聳（そびや）かせて通りかかった。彼はここに住んでいる被害妄想狂の瑞典（スウエデン）人だった。しかも彼の名はストリントベルグだった。僕は彼とすれ違う時、肉体的に何かこたえるのを感じた。

　この往来は僅かに二三町だった。が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黒い犬は四度も僕の側を通って行った。僕は横町を曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウイスキイを思い出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黒と白だったのを思い出し

た。それは僕にはどうしても偶然であるとは考えられなかった。若し偶然でないとすれば、――僕は頭だけ歩いているように感じ、ちょっと往来に立ち止まった。道ばたには針金の柵の中にかすかに虹の色を帯びた硝子の鉢が一つ捨ててあった。この鉢は又底のまわりに翼らしい模様を浮き上らせていた。そこへ松の梢から雀が何羽も舞い下って来た。が、この鉢のあたりへ来ると、どの雀も皆言い合わせたように一度に空中へ逃げのぼって行った。……

　僕は妻の実家へ行き、庭先の籐椅子に腰をおろした。庭の隅の金網の中には白いレグホン種の鶏が何羽も静

かに歩いていた。それから又僕の足もとには黒犬も一匹横になっていた。僕は誰にもわからない疑問を解こうとあせりながら、とにかく外見だけは冷やかに妻の母や弟と世間話をした。

「静かですね、ここへ来ると」

「それはまだ東京よりもね」

「ここでもうるさいことはあるのですか？」

「だってここも世の中ですもの」

妻の母はこう言って笑っていた。実際この避暑地もまた「世の中」であるのに違いなかった。僕は僅かに一年ばかりの間にどのくらいここにも罪悪や悲劇の行

われているかを知り悉(つく)していた。徐ろに患者を毒殺しようとした医者、養子夫婦の家に放火した老婆、妹の資産を奪おうとした弁護士、——それ等の人々の家を見ることは僕にはいつも人生の中に地獄を見ることに異らなかった。

「この町には気違いが一人いますね」

「Hちゃんでしょう。あれは気違いじゃないのですよ。莫迦(ばか)になってしまったのですよ」

「早発性痴呆(ちほう)と云うやつですね。僕はあいつを見る度に気味が悪くってたまりません。あいつはこの間もどう云う量見か、馬頭観世音(ばとうかんぜおん)の前にお時宜(じぎ)をしていまし

た」

「気味が悪くなるなんて、……もっと強くならなければ駄目ですよ」

「兄さんは僕などよりも強いのだけれども、――」

無精髭を伸ばした妻の弟も寝床の上に起き直ったまま、いつもの通り遠慮勝ちに僕等の話に加わり出した。

「強い中に弱いところもあるから。……」

「おやおや、それは困りましたね」

僕はこう言った妻の母を見、苦笑しない訣には行かなかった。すると弟も微笑しながら、遠い垣の外の松林を眺め、何かうっとりと話しつづけた。（この若い

病後の弟は時々僕には肉体を脱した精神そのもののように見えるのだった）

「妙に人間離れをしているかと思えば、人間的欲望もずいぶん烈しいし、……」

「善人かと思えば、悪人でもあるしさ」

「いや、善悪と云うよりも何かもっと反対なものが、……」

「じゃ大人の中に子供もあるのだろう」

「そうでもない。僕にははっきりと言えないけれど、……電気の両極に似ているのかな。何しろ反対なものを一しょに持っている」

そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだった。僕は思わず空を見上げ、松の梢（こずえ）に触れないばかりに舞い上った飛行機を発見した。それは翼を黄いろに塗った、珍らしい単葉の飛行機だった。鶏や犬はこの響きに驚き、それぞれ八方へ逃げまわった。殊に犬は吠え立てながら、尾を捲いて縁の下へはいってしまった。

「あの飛行機は落ちはしないか？」

「大丈夫。……兄さんは飛行機病と云う病気を知っている？」

僕は巻煙草に火をつけながら、「いや」と云う代りに

頭を振った。

「ああ云う飛行機に乗っている人は高空の空気ばかり吸っているものだから、だんだんこの地面の上の空気に堪えられないようになってしまうのだって。……」

妻の母の家を後ろにした後、僕は枝一つ動かさない松林の中を歩きながら、じりじり憂鬱になって行った。なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通ったのであろう？　なぜ又あのホテルは巻煙草のエア・シップばかり売っていたのであろう？　僕はいろいろの疑問に苦しみ、人気（ひとげ）のない道を選（よ）って歩いて行った。

海は低い砂山の向うに一面に灰色に曇っていた。そ

の又砂山にはブランコのないブランコ台が一つ突っ立っていた。僕はこのブランコ台を眺め、忽ち絞首台を思い出した。実際又ブランコ台の上には鴉が二三羽とまっていた、鴉は皆僕を見ても、飛び立つ気色（けしき）さえ示さなかった。のみならずまん中にとまっていた鴉は大きい嘴（くちばし）を空へ挙げながら、確かに四たび声を出した。

　僕は芝の枯れた砂土手に沿い、別荘の多い小みちを曲ることにした。この小みちの右側にはやはり高い松の中に二階のある木造の西洋家屋が一軒白じらと立っている筈だった。（僕の親友はこの家のことを「春の

いる家」と称していた）が、この家の前へ通りかかると、そこにはコンクリイトの土台の上にバス・タッブが一つあるだけだった。火事――僕はすぐにこう考え、そちらを見ないように歩いて行った。すると自転車に乗った男が一人まっすぐに向うから近づき出した。彼は焦茶いろの鳥打ち帽をかぶり、妙にじっと目を据えたまま、ハンドルの上へ身をかがめていた。僕はふと彼の顔に姉の夫の顔を感じ、彼の目の前へ来ないうちに横の小みちへはいることにした。しかしこの小みちのまん中にも腐った鼹鼠（もぐらもち）の死骸が一つ腹を上にして転がっていた。

何ものかの僕を狙っていることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な歯車も一つずつ僕の視野を遮（さえぎ）り出した。僕は愈（いよいよ）最後の時の近づいたことを恐れながら、頸（くび）すじをまっ直にして歩いて行った。歯車は数の殖えるのにつれ、だんだん急にまわりはじめた。同時に又右の松林はひっそりと枝をかわしたまま、丁度細かい切子硝子（きりこガラス）を透かして見るようになりはじめた。僕は動悸（どうき）の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まろうとした。けれども誰かに押されるように立ち止まることさえ容易ではなかった。……

三十分ばかりたった後、僕は僕の二階に仰向けにな

り、じっと目をつぶったまま、烈しい頭痛をこらえていた。すると僕の眶（まぶた）の裏に銀色の羽根を鱗（うろこ）のように畳んだ翼が一つ見えはじめた。それは実際網膜の上にはっきりと映っているものだった。僕は目をあいて天井を見上げ、勿論何も天井にはそんなもののないことを確めた上、もう一度目をつぶることにした。しかしやはり銀色の翼はちゃんと暗い中に映っていた。僕はふとこの間乗った自動車のラディエエタア・キャップにも翼のついていたことを思い出した。……

　そこへ誰か梯子段（はしごだん）を慌（あわただ）しく昇って来たかと思うと、すぐに又ばたばた駈け下りて行った。僕はその誰かの

妻だったことを知り、驚いて体を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の間へ顔を出した。すると妻は突っ伏したまま、息切れをこらえていると見え、絶えず肩を震わしていた。

「どうした？」

「いえ、どうもしないのです。……」

妻はやっと顔を擡(もた)げ、無理に微笑して話しつづけた。

「どうもした訣ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまいそうな気がしたものですから。……」

それは僕の一生の中でも最も恐しい経験だった。――

——僕はもうこの先を書きつづける力を持っていない。こう云う気もちの中に生きているのは何とも言われない苦痛である。誰か僕の眠っているうちにそっと絞め殺してくれるものはないか？

底本：「河童・或る阿呆の一生」新潮文庫、新潮社
　　　１９６８（昭和43）年12月15日発行
　　　１９８７（昭和62）年11月５日41刷
入力：蔣龍
校正：田中敬三
２００９年３月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。